請願第２号

２０１５年7月１７日

川崎市教育委員会委員長　　峪　正人　様
川崎市教育委員会教育長　　渡邊　直美様

「教育シンポジュウム実行委員会」
実行委員長　橋本　清貴
川崎市多摩区[redacted]
０４４－[redacted]
事務局長　　五十嵐　努
川崎市幸区[redacted]
０４４－[redacted]

中学生死亡事件の検証と再発防止のため、市民との開かれた対話を進めることを求める請願

１、　請願の趣旨

川崎市で２月に起きた中学生死亡事件の検証と再発防止のため、日夜努力をしていらっしゃることに敬意を表します。

さて、私たちは、上記の事件に対し、二度とこのような事件が起きることがないようにとの思いから、６月６日にエポック中原でシンポジュウムを行いました。

その様子は、資料①「東京新聞記事」、資料②「進行役メモ」、資料③「６・６教育シンポジュウムメモ」をご覧になればお分かりのように、まず、三人のパネラーの方からの発言があり、その後フロアーからは１４名の方々からの発言、６６名の方からのアンケートがありました。この種の集会では１１８名の参加者の半数以上のアンケートという関心の高さが示されたシンポジュウムでした。

その後私たちは、「６・６教育シンポジュウム『まとめの会』」を開き、結論として以下の内容を確認しました。

すなわち、教育委員の方および「中学生死亡事件に係る教育委員会事務局検証委員会」のメンバーの方と、この問題に関心を持つ市民との「開かれた対話の機会」を作っていただくよう要望をしようということです。

この「対話の場」は、対策をまとめられた方と教職員・市民が直接意見交換をして、教職員・市民も「中学生死亡事件に係る教育委員会事務局検証委員会報告書」への理解を深め、それぞれの立場でこの問題を考え続け、再発防止の取り組みをすすめていくためのものです。

「中学生死亡事件に係る教育委員会事務局検証委員会　報告書」は、作成･公表されればそれで役割を終えるというものではありません。教職員・市民との対話を通じてその内容が教職員・市民に良く理解され、子どもたちの健やかな成長のため活用されてはじめて意味を持つものと思われます。

その為には様々な方法が考えられると思います。たとえば、今回のように市民が主催するシンポジュウムに教育委員会の方にパネラーとして参加して頂き、直接市民と対話する。あるいは川崎市教育委員会主催でシンポジウムなど対話の場を設定していただくなどです。

「対話の場」は、何らかの結論を出して参加者を拘束するというものではなく、参加者一人一人がこの問題についての理解を深め、今後に生かせば良いわけですから、参加される川崎市、教育委員会、の方も全く同じで、ここでの議論に拘束されません。以上がこの請願の趣旨です。

２、　請願事項

川崎市教育委員会として、「中学生死亡事件に係る教育委員会事務局検証委員会　報告書」に関わる「市民との開かれた対話の場」を設ける、あるいは市民が主催するシンポジュウムに教育委員会の方にパネラーとして参加して頂くなどして、中学生死亡事件の検証と再発防止のため、市民との開かれた対話を進めてください。

以上

川教
庶務課
収 '27.7.17 受
第　　号

請願第2号
資料①
「東京新聞記事」

「学校、親、地域の力を」

いじめ、暴力から子ども守れ

川崎中1殺害事件受けシンポ

川崎市で中学一年の男子生徒が殺害された事件を受け、市民が再発防止策を探るシンポジウムが六日、市内の市総合福祉センター（エポックなかはら）で開かれた。教員OBやPTA役員らは「力を合わせて暴力やいじめから子どもを守ろう」と話し合った。

犠牲になった上村遼太君＝当時（一三）＝は事件前、顔にあざをつくったり学校に来なくなったりした。こうした異変やSOSに周囲の大人が気付く機会はあったとされ、地域や学校で何ができるかを議論した。

学校や保護者、地域の代表者が登壇。三月まで市立中学の教員だった大前博さん（六五）は「学校現場は多忙だが、子どもの命を最優先に向き合うべきだ」と強調。教職員がチームで見守り、子どもと信頼関係をつくる大切さを語った。

中学校のPTA副会長、佐野仁昭さん（四七）は「保護者の横のつながりを見直したい」と説明。子どもの支援に携わる腹話術師、城谷護さん（七四）は事件現場の多摩川河川敷に今も多くの人が訪れることに触れ「皆、人ごとではないと思っている。市教育委員会はもっと地域の力を活用してほしい」と訴えた。会場の住民や保護者からも「地域と子どもが顔見知りになる取り組みや声掛けが必要」といった発言があった。

（横井武昭）

子どもの命を守るため、地域や学校が連携した再発防止策を話し合うシンポジウムの参加者ら＝中原区で

請願第2号 資料②「進行役メモ」/資料③「6・6教育シンポジュウムメモ」

6．6「中１事件　シンポジウム」進行役としてのメモからの発言記録　文責　市古

進行役 市古	（教職員連絡会としての３つの提言を簡単に説明し、シンポジウムの基調報告とした。）
パネラー１ 大前	発言レジュメ参照
パネラー２ 佐野	学校と保護者のつながりが希薄に 中学校区地域教育会議の意義　多角的に子どもをみることができるのでは 不登校～貧困や差別の問題との関連～中学校の学校経費が高い 文化の問題　携帯電話、ライン、これにどう向き合っていくか。大人が考え直す。 先生たちの意見をしっかりと聞きたい。PTA 役員として学校に行っても、先生たちには、とても、話しかける状況にはない。役員をしていても、なかなかつながれない。
パネラー３ 城谷	助けられなくてごめんという思いはだれにもある。では、そのごめんの中身が問題 今の中学生、将来に期待がもてない層が広がっている。地域の中の差別、地域の中の外国人の問題 どうするか　自分が必要とされているのを感じられるか 臨港中学校の地域教育会議　職業体験、中学生が身を持って自分が役に立つことを体験することの意味、宮前区での「道親」のとりくみ 社会教育委員として意見をだし、次回は、この問題をテーマに話し合うようにした。 「優」を大切に。
フロアー発言１	男性：３年生のこどもがいる、 人生の楽しさを教えるのが教育だ、人生の楽しさがわかれば、いろんな困難があっても向かっていける。 今の教育にかけているものは、つながり。 子どもの変化に気づく、子どもはゲームをやっている、時々、こちらを見る、アイコンタクト、いつも見ているよ！のメッセージを。目をそらすようになったら、何かあると気づける、 学校でもあいさつを言う、高校生にさよなら、最初は不信、だんだん変化、話しかけてくる子もでてきた。先ほどの道親、すごく大事。みんなが自分たちを見てくれている。安心感。犯罪も入りにくい。 小学校での不登校予備軍がいる、小学校から学級の人数を減らす、条件整備が必要。
フロアー２	男性：パネラーの発言で、もっと、子どもの声、教職員の声を聞こうという点に大賛成。だが、川崎の教育委員会は教職員のアンケートや子どもの聞き取りからは、読み取れていない、なぜ読み取れないのか。共通理解の体制ができているがほとんどだが、そうでない少数の先生たちの具体的な声を読み取る必要アリ。 子どもたちからも、聞き取りではなく、アンケートをとるべきだ。保護者からも。これはその気になれば学校でも教育委員会でもできる。 地域教育会議の大事さをもっと評価すべきだ。 大津市での成功例からわかるのは、外部からきちんとした意見者を入れたことだ。 川崎は全国で最初にこどもの権利条例ができているのに、きちんとした取り組みが行わ

	れていない。声明や問題提起には不満がある。
フロアー３	女性：１８年前に PTA を卒業。質問は、先生にいうことが、「ちくる」と受け止められる問題が気になる。 子どもたちの声をどう聞き取るか。先生たちが忙しさの中で、教師とのコミュニケーションをどう取れるのかが、課題だ。
フロアー４	男性：定時制には、被害者、加害者と言われている子ども達と同じような子どもたちがいる。今回の彼ら…同年代の子たちからは、ハブかれていたのではないか、同じ子たちの集団の中にいられなかった。学校の中では目立たない存在。教員としてもどうつながるかが難しい。地域のなかでの姿を、地域の人の力を借りることしかないが、高校では、地域が限定されていないので難しい。 市教委の指示で、不登校だけでなく長期欠席。毎日報告を上げるようになる。3 日休みが続いたら全部報告というが、定時制では２４パーセントがあてはまる、４人に一人の子どもへの対応ができるだろうか。 一ヶ所で相談できるような場を作ってほしい。
フロアー５	男性：退職１１年目。小中高のお手伝い。ここで抜けているのは、教室の視点だ。子どもたちの声を日常的に聞く場は、自分を必要とされる経験、子どもの学習権の保障、それらは授業ではないか。それがどうなっているのか。一番大きな問題が横たわっている。全国２０校を訪問。不登校をゼロにした学校もでてきた。鐘がなっても半分は遊んでいる、この状況を変えてこられた。日常的な教科の学習の中で、子どもの声が聞ける。先生たちの仕事のメインは、子どもたちの声を聞き取れる学びのある授業をどう作るかだ。授業を中心にした学校づくりの広がり～映画「みんなの学校」をぜひ見てほしい。川崎区でもぜひ自主上映運動をしてはどうか。児童数 200 人、特別支援児童が多かった、それがどう変わっていったか、ぜひ、見て欲しい。
フロアー６	女性：2 人の子を育ててきた。今回の事件、たいへん悲しい。市教委の報告をインターネットで読んで、 そこでの提案は大事なことだが、中学校の教職員の現状で本当にできるのか、思いました。また、命の教育を道徳教育でと書かれていたが、それだけではやれないことがある。この問題は、教育の問題でもあり、社会の問題だ。加害者の子たち、高校で安心して行く場所がない、働き場がない、被害者の親も、朝から生活のために働くことで，子どもとじっくり向き合えない。外国籍の隣人への攻撃や差別。
フロアー７	女性：中１のとき、不登校になる。どうして不登校になるかを体験では知っている。学校の対応、教育委員会の対応も知った。不登校の子や、犯罪に走った子の気持ち、特別支援学校に通う子の気持ち、自殺をする子の気持ちを、声をしろうとしているのですか。それを知らなければ教育は成り立たない。子どもの声をどうやって聞くのかが見えてこない。それを知らない教育者は偽善者ではないか。 もう一つ、そういう子の気持ちがわからないのは、見えとかで、ガチンガチンになっている先生や親には、子どもたちの声は聞こえないのではないか。
フロアー８	男性：NPO 法人で精神障害者の支援をしている。先生たちが中心になって、こういう集まりをもつのはすごい。私たちの職場でも、こういう場を作らなければと考えているが、なかなかできないのが現状です。

	私たちのまわりの彼ら、不登校、精神障害者、家族問題など、身近に生きづらさを日々感じている。自分から死を選ぶことなく、よくがんばっていると思う。そういう観点から、2点、提案には、違和感がある。 第1は、連絡会の提言のなかで、「全日制高校への進路希望者の夢を後押し」というところには、違和感がある。高校行ったって…という時代なのに？こういうメッセージを先生たちが発すると、学校に行くのがいやだという子たちはどうするの？ということ。そこの問題はないか。 もう一つは、不登校「対策」という形では動かないでほしい。そういう問題ではない。現場の先生たちは、別の言葉を使って欲しい。
フロアー9	女性：中学3年生の子を持つ親として、ショックを受けた。息子と話をした。もしかしたら、自分に息子が被害者、加害者になるかもしれない。 息子には、自分たちだけで解決できないこともあり、そんな困ったときに、自分や自分たちだけで解決するな、親に相談して欲しいと言った。中学区3年、反抗期もあり、話を聞きにくいのだが、親として、自分の息子をしっかりと見守っていくことが大切だと思っている。そして、もし、家庭でできないことは先生たちに相談していきたいとおもっている。
フロアー10	女性：宮前区の地域教育会議に参加してきた。宮前区の金属バット事件がきっかけ。何かしよう、ということで、地域のみんなで。二度と子供たちに寄り添い、加害者、被害者を出さない。考えていく視点として、学校が先でなく、地域、家庭、学校の順だと思う。ボトムアップだ。トップダウンではない。 今回の事件を受けて、たいへんショック、これから総会を開いていく。 何ができるか。地域で子どもとつながる努力、「道親」の実践、道で会った子はみな自分の家の子どもという目でみていこう。顔見知りになる。そのために、手つなぎまつりをやってきた。道親がバッジをつけて、顔見知りになる取り組み。 今は、寺子屋事業にもかかわっている。勉強をする場だが、良い点は、1年生から6年生までがいっしょに学ぶことに意味がある。寺子屋の体験講座もいい、地域の人が知りあえる。
フロアー11	男性：生活保護担当していたとき、川崎区では、子どもの貧困への取り組みとして、平成24年度から、中学3年生の進学に向けた支援、進路支援事業を進めている。NPO法人などに、会場や先生役をお願いする。スタートは、江戸川区の中3勉強会。江戸川区の生活保護担当職員が手弁当で教える。川崎市全体、川崎区では、区として事業として進めている。区役所の保護課が担当。参加ができる。 これをやらないと、その後が大変になるという問題意識。
フロアー12	女性：事件当時、中学3年生の娘の母親。私も、受験の時期だったが、大事なことだと。子どもとこの事件についても、電話で話し合った。今、中学校区を超えて、高個性ともつながっているので、こわいな。SOSを発信してほしい。きちんと受け止められるようにしたい。 娘が言うには、学校ではこの問題は全然ふれられていないという。なぜだろうか。中学生はみんな気になるはずなのに、なぜ、学校ではこれを取り上げないのか。できないのだろうか。保護者もやれることはやっているが、学校でもぜひ取り組んでほしい。

フロアー13	男性：先ほどの方の「授業が大切だ」の意見に賛成。地域も大事だが、やはり学校だ。では、そこまでやれる先生がどれだけいるのだろうか。あまりにも秀才のコースの先生では理解をできるのか。それを知りたい。 心の中の闇にひっぱられる子どもたちをどう救えるのか。今回の事件では、外国籍の問題は必ずある。川崎区の地域での差別感情などを取り上げる。どう違いを認め合っていける地域を作っていけるのか。
フロアー14	男性：一市民として話を聞いていて、今までの議論に欠けているものを感じて発言する。教育、生活保護の話は出ているが、政治の話が出ていない。オスプレイ１機が100億円もする。それをしているのは政治家、それを選んでいるのは私たち。選べる大人になっているか。その視点を忘れてはならない。選んでいる大人の責任を感じる。
まとめ 大前	８０年代、学校が荒れていたとき。そのとき、今、子どもたちがどうなっているか、クラス、地域、学校単位で話し合った。地域からも多くの声を聞いた。親の意見討論もあった。 一つ一つのクラス、学校でして話し合いの場を作っていくことが大事。今回、学校現場は受身だった。 私の学校では、学年集会でも、一人になっている仲間はいないかを話した。生徒たちは先生が何を考えているかを受け止めている。 ちくる、について。ちくると言うのは、ヘルプとは違う。だれも、いじめられていい子はいない。それなのに、いじめられていたら、ヘルプをだすのは当然だ。
まとめ 佐野	外国籍の親御さんのことが幾人かが発言があった。 PTA 活動の中で、自分たちのところの PTA 文書では、漢字には全部ひらがなをふったものにするなどに配慮をしてきた。しかし、外国人の方に PTA 役員になってもらうのを初めからさけて、声をかけない傾向があった。こまったことだという声も聞こえるが、しかし、外国人の保護者のことで「こまった問題」にしているのは、自分たちではないか。こまったではなく、こまっているならば手をつないでいくことだ。今後の PTA 活動の中にいかしていきたい。 もう一つ、地域のことで。自分の子育ての経験からは、子どもたちを学童保育にあずけて、親同士が子どもをみんなで見てきた。大きくなっても、子どもたちとはつながっている。残念だが、今のワクワクプラザの機能とは違う。学童の役割の再確認が必要だ。
まとめ 城谷	感想として、今日は、充実した意見が聞けたシンポになった。一人ひとりが自分のこととして考え、発言をされているからだと思う。 まとめで言いたいことは、個人情報を隠れ蓑にしてはいけない。市教委の報告書を読むと、肝心なところに来ると個人情報のため省略が続く。真剣に考えるならば、そこに踏み込まなくてはだめなのではないか。 次ん、授業のことで大事な指摘があった。ぜひ、授業の集団化、グループ化、みんなが落ちこぼれがないように集団で取り組めるようにしたらいい。だが、そのためには、今の先生たちの悪い条件のままではだめ。今のまま、あれやれ、これやれでは、おしつけになるだけだ。本当の改善のためには、少人数学級にすることや、先生たちの事務作業をへらし、授業に集中できる条件づくりを進めていこう。 私は以前、現場で、船の設計の仕事をしていた。その頃は、私が設計でミスっても、次

	のステップの担当者がミスに気づいてくれる。謝ってミスを直す。そうやってチームの力で、無事に船が完成した。 しかし、今の現場ではそれができない、ミスが見つかると、「だれがやった、責任をとれ」という風になった。現場が、「協力するチーム」ではなく、競争社会になっている。これでは、みんなが伸びていくことができない、必ず落ちこぼれが出てしまう。いっしょに歩こうね、進もうねという社会を時間がかかっても作ることが大事。
実行委員会からのまとめのあいさつ	たくさんの貴重な意見がよせられた。進行役としてのまとめと提案をしたい。 まず、今日のシンポにも現れている市民の力を、もっと市教委や行政は信頼をし、生かしてほしい。 また、今回の問題を考えていく上で貴重な実践が、短い時間の中でも、多方面から報告されている、川崎市と市教委はこれらの力をもっと生かしてほしい。 ところが、中１事件が議題になった市教育委員会議の傍聴に行くと、この報告の時は、個人情報が理由になって、秘密会になり、傍聴者は追い出される。こんなに関心のある問題で教育委員さんの生の声を、まだ一度も聞くことが出来ない。 ぜひ、川崎市と市教委は、最終報告を出す前に、市民レベルでの話し合いの場を作っていくべきだと強く感じている。 そして、川崎市と市教委は最終報告書をぜひ、子どもたちに、保護者に、市民に向けて出して、積極的な論議の場を作っていってほしいと思います。